

佳作

がんばったねの笑顔

香川県 高松市立高松第一中学校二年 石原望

スタートラインに立ち、今まで支えてくれた仲間
の姿を思い浮かべる。陸上部のみんな、先生方、家
族。私が百メートル先のゴールラインを超えたとき、
みんなは「がんばったね」と笑ってくれるだろうか。

私は、小学生の頃から陸上競技をしていた。専門
種目はハードル走。その頃は陸上が楽しくて仕方が
なかった。私は、陸上のとりこになった。

中学生になり、私は迷うことなく陸上部に入った。
初めはやる気満々だった。しかし、そのやる気は絶
望に近い気持ちに変わってしまった。ハードルが跳
べなくなったのだ。どう頑張っても次のハードルに
届かない。だんだんハードルを跳ぶのが怖くなった。
今、跳べなかったら自分がダメなやつだと証明され
そうで怖かった。しだいに走ることさえ嫌になって
いった。

「ハードルやらないの？」

という友達や先生の何気ない一言に腹が立った。私
はやってもできなかった。「どうせ今やってもでき
ないんだ」。そう心の中で言い訳をして、やるせな
い気持ちをごまかしていた。

記録も伸びず、ハードルへの未練をごまかしたま
ま、二年生になった。どこかで、このままではだめ
だと思ってもなかなか素直になれず、やっと決
心できたのは二年の七月。大会のたった二十日前だ
った。やっと、自分の力を試してみよう、と思うこ
とができた。

一日の終わりが早く感じた。寝ている間も走って
いたいと思った。こんな感覚は久しぶりだった。私
は焦りながらも、走ることを本気で楽しんでいた。

スタンド席を見る。今まで一緒に練習してきた仲
間がいる。どんな時も背中を押してくれた母がいる。
私はもう一度、気合を入れ直した。ついに本番だ。

「オンユアマークス。」

私はスタートの姿勢をとる。ふるえる手を軽くゆ
すってほぐす。そして、スタートの合図。それと同
時に、一気に飛び出す。一台目、二台目…リズム良
くこえていく。あんなに遠く感じていたハードルが

今はすごく近く感じる。自分の体がぐんぐん前に進
んで、次のハードルに届く。私は、ちゃんと成長し
ていた。疲れも感じないまま、いつの間にかゴール
ラインをこえていた。振り返ると、仲間の姿が小さ
く見える。表情までは見えないけれど、きっと笑っ
ている。

私は真っ先に母に会いに行った。

「お母さん。」

母が振り向いて笑顔になる。

「頑張ったやん。」

私が一番聞きたかった言葉だ。頑張れば、きっと
次のハードルに届く日がくる。頑張れば、ゴールラ
インに届く日がくる。そう信じてことができる私な
ら、これから先、何があっても大丈夫だと感じた。